

## 「本性を考察する第十五章」

本性が有ることの理由を否定する>因縁を我所（我がもの）とすることが、本性として有ることを否定する>

[章の著述を説く]

ここに言う。「諸事物の本性はまさしく有る。（何故ならば）それらを生じさせるものである因と縁を、近く取る故である。ここで、有るのではないものにおいては、生じさせるものである因や縁を近く取ることは有るのではなく、例えば虚空の花の如くである。芽や（十二縁起の）諸行等は、生じさせるものである因縁の、種子や無知等を近く取るのでもあり、それ故に事物の本性はまさしく有るのである。」

章の著述を説く>諸事物が本性として有ることを否定する>本性として有ることの理由を否定する>本義>

[本性に因縁は必要なく、矛盾すると示す]

述べよう。もし、行や芽等の諸事物に本性が有るならば、その時、有となった諸物に因や縁による如何なる必要性が有ろうか。「斯くも、現在形となった諸々の行や芽等についても、生じさせられる為に無知や種子等を親因にせぬが如く、他についてもそれが生じさせられる為に、取られるもの（果）にされなくなる。（何故ならば）その本性は有るとなる故である。」と示す為に、

本性が、因と縁より、  
起こるとは正理ではない。

と説かれた。

『仮に、何かよりそれがまさしく有ることによって生が無意味となる、生の以前に、如何なる事物にも本性は有るのではない。ならば何かといえば、生の以前に有るのではない本性のみが、因と縁に依拠して、後に起こるとなる。』と思えば。

そのように主張しても、

因と縁より起こった  
本性は、所作<sup>1</sup>を持つものとなる。 1

<sup>1</sup> 所作：作られたもの。生じたもの。無常・有為・事物等と同意。

『仮に、因と縁より起こったので、本性がまさしく所作となることは、主張するのみであり、それ故に、本性がまさしく所作であると承認した故に、所作が背理となる論争をすることは、我々を批判するものではない。』と思えば。

これも正理ではないと説かれた。

本性が所作を持つものであると、  
如何様であれば適するとなろうか。

「所作でもあるが、本性でもある。」というこれは互いに反する故に、無関係という意味である。

このようにここで「自らの本質とは本性である。」と、毘婆沙論からは、所作である事物は世間において「本性」とは述べられない。例えば水の熱さや、猫目水晶等を宝石職人の努めによって紅蓮宝石等の事物にしたようなものである。

本性であるものは非所作であり、例えば火の熱そのものか、紅蓮宝石等、諸々の天然石の紅蓮宝石等の本質の如くであり、それは他の事物と会合したことによって生じさせられたのではない故に、「それらの本性」という。それ故に、そのように「本性とは非所作である。」と世間の世俗名称に全く留まり、ここで我々は『熱そのものであるものも、所作である故に、火の本性ではない。』と捉えたまえ。」と言う。

ここで、宝石や火切りや日光の照射や、火切り杵や火切りをしたことより起こった火は、因と縁にまさしく相互関係すると認めるが、火より他の熱そのものも無い故に、熱そのものも因と縁によって生じさせられるのであり、それ故に所作であり、所作である故に「水の熱さの如く本性ではない。」と、余りにも明らかに確認するのである。

もし、『火の本性は熱そのものである。』と牛飼い男や女性に至るまで公認されているのではないのか?』といえば。

何?我々が「公認されていない。」と言ったか?

「これは本性であることに値しない。(何故ならば)本性として性相と離れる故である。」というこれを、我々は言う。無知の誤りに後続する故に、世間人が、まさしく本性が無い事物の様相を、まさしく本性と共にあると分別したのである。斯くも、眼障を持つ者達がまさしく本性の無い落髪等を、眼障の縁によつ本性そのものであると頭かに執するが如く、幼子達は無知の眼障によつて知恵の眼がまさしく衰えたことによつて、本性が無い事物の様相を、まさしく本性

と共にあると頭かに執することとなり、他に認められないことからまさしく特別であるとして、「火の本性の自らの性相（定義）とは、熱である。」と頭かに執したそのままに性相（定義）を言う。（何故ならば）「我性の性相（定義）とは、自らの性相（定義）である。」と言われる故である。その者達にまさしく公認された面より、世尊も阿毘達磨において、それらの世俗の自らの本質を設けられたが、「無常等の共通のものは総体の性相（共相）である。」と説かれた。

無知の眼障と離れ、汚れの無い智慧の御目を持たれる方々がご覧になることに応じた時、眼障と離れた方々が、眼障のある者が認める落髪を見られないように、幼い者の心が考察した本性をご覧になっていない聖者方が、「これは、諸事物の本性ではない。」とはっきり説かれたのであり、斯くも『聖楞伽經』より、

「斯くも眼障を持つ者達が、落髪と誤って捉えるように、その如く事物であるとするこの分別を、幼子が誤って考察した。本性は無く、識（知覚）は無い。阿頼耶<sup>2</sup>は無く、事物は無いけれど、悪児である論争者、死体に似た者が、これらを考察した。」

や、その如く

「偉大なる知恵者よ。本性として生じていないことを御考えになり、私は『一切法（現象）は生じていない。』と説かれた。」

と詳細に説かれた如くである。

本義> [自説における本性の定義を示す]

ここで言う。「もし、『火の熱そのもの等、これは因と縁より起こったので、まさしく所作である故に、本性ではない。』と言えば、ここで、それらの本性の定義は何であり、その本性も何であるか述べなければならない。」

述べよう。

諸々の本性とは、作られたものではなく、  
他に相互関係が無いものである。 2

これは「自らの事物とは、本性である。」というので、「ある事物の我所（我がもの）の本質であるものは、その本性である。」と述べられた。何が何の我所であるかといえ、何かによって作られていないものである。作られたものは、その我所ではなく、例えば、まさしく水の熱さの如くである。何かに頼っていないものも、その我所であり、例えば、自らの荷物や自らの財宝の如くである。

<sup>2</sup> 阿頼耶<sup>あらいや</sup>：全て基体。全ての拠所。

何かの他に頼るものは、その我所ではなく、例えば、一時的な借り物に自由は無いが如くである。

何故ならば、そのように、作られたものや他に相互関係するものは、まさしく本性であると主張しない故に、「熱そのものが火の本性である。」ということは正理ではない。(何故ならば) 因と縁に頼る故と、以前に起こっていない状態から後に起こるので、所作である故である。

何故ならば、これはそのようである故に、三時制においても火に誤らず(具わる) 本来の作られたのではない本質、以前に無く後に起こるのではない、水の熱さや、あちらこちらや、長短のように、因縁に対して相互関係と共にあるとなっていないものを、本性であると述べた。

「何? そのようになった火自体の本質が有るのか?」といえは。

それは自らの本質として有るのでもないが、無いのでもない。勿論そのようではあるけれども、しかしながら聴聞者達の恐れを斥ける為に、無いものを有るとして「世俗としてそれは有る。」と言う。

斯くも世尊が、

「文字の無い法において、聴くとは何か。教示するとは何か。捏造したものに文字は無い。それは聴き、教示することでもある。」

と説かれた如くである。まさしく本論よりも、

『空である。』とも述べず、『空ではない。』ともしない。二つともと、二つともでないともせず、名付けられた意味として述べよう。<sup>3</sup>

と説かれるであろう。

もし、「捏造したことより『それは有る。』と述べたならば、それは如何なるものか」といえは。

それ自体の本質とは「諸法(現象)の法性」というものである、まさしくそれである。そしてこの諸法(現象)の法性も何であるかといえは、諸法(現象)の本質である。この本質も何かといえは、本性である。この本性も何かといえは、空性である。この空性も何かといえは、無本性である。この無本性も何かといえは、真如である。この真如も何かといえは、真如の本質はまさしく変化が無いことと、まさしく常住することである。(何故ならば) 一切の様相において無生性とは、作られたものではない故と、他に相互関係が無い故に、「火等の本性である。」と述べられた。

<sup>3</sup> 『空で…述べよう。』: 『根本中論』第 22 章 11 偈。

(それは) このように示されるとなる。無知の眼障の力によって認められる事物の様相は、ご覧にならない方法で (ご覧になる)、無知の眼障と離れた如何なる聖者方の (認識する) 対象となろうか。まさしくその本質が、それらの本性であると設けた。

「諸々の本性とは、作られたものではなく、他に相互関係が無いものである。」

というこれは、「阿闍梨方がその定義として設けられたのである。」と知りたまえ。

「諸事物の本性となったその無生も、まさしく何ものでもないことによって、単なる無事物であるので、本質が無い故に、事物の本性として有るのではない。」と知りたまえ。

斯くも世尊が、

「諸事物を無事物と知るものは、何時も全ての事物に執着しなくなる。何時も全ての事物に執着の無い者。その者は無相の禪定に触れる。」

と説かれた如くである。

本性として有ることの理由を否定する > [それによって他の三極辺を否定したと示す]

ここで言う。「もしまた、諸事物に本性があるのではないと見るとしても、先ず、他である事物は有る。(何故ならば) それは否定されていない故である。他である事物が有るならば、本性も有ることになる。(何故ならば) 本性無くして他の事物は成立しない故である。」

述べる。

本性が有るのでなければ、  
他である事物が何処に有ろうか。  
他である事物の本性が、  
「他の事物である」と述べられる。 3

ここで、世間においては、ただ本性のみが他の本性に相対して「他の事物」と述べられる。もし、熱そのものが火の本性であるならば、湿潤の本性を持つ水に相対して「他の事物」と述べられるとなるものであるが、尽く分析したならば何ものにも本性が有るのではない時、他性が有ると何処でなろうか。他性が無いので、本性も有るのではないと成立した。

ここで言う。「もしまた、本性と他の事物が有るのではないと見るとしても、

事物は、先ず有る。(何故ならば) 否定していない故である。その事物が有るとしても、本性あるいは他の事物であるものとならなければならない、それ故に、本性と他の諸事物も有るとなるだろう。」

述べる。

本性と他の事物  
 以外に、事物が何処に有ろうか。  
 本性と他の事物が  
 有るならば、事物が成立するとなる。 4

このように、事物を考察したらならば、本性か他の事物の何れか? と問えば。その二つも、前述の論法によって有るのではない。それ故に、その二つは無いので、「事物も有るのではない。」と確認したまえ。

ここで言う。「もしまた、君が事物を否定はしたが、そう見るとしても無事物はまさしく有る。(何故ならば) 否定しなかった故である。それ故に、相反するものが有るので、事物も有るとなる。(例えば) 無事物の如くである。」

述べよう。「もし、無事物そのものが有るならば、事物も有るとなるが、有るのではない。」と説かれた。

もし、事物が成立していなければ、  
 無事物が成立するとはならない。  
 事物が他に变化したものが、  
 無事物であると、人は言う。 5

ここでもし、「事物」という何かが有るとなれば、それが他に变化したことより無事物となるものであり、このように、壺等が現在の時点より衰え、他への変化を得たものが、世間において「無事物」という言葉で述べられるものとなるのである。これら壺等が事物の自性として成立していない時、有るのではない本性を持つ諸物に、まさしく他に变化するものが有ると何処でなろうか。それ故に、無事物も有るのではない。

本性として有ることの理由を否定する> [否定した意味であるという見解を叱責する]

それ故に、そのように一切の様相において本性と他の事物や、事物と無事物

が有るのではないものに、無知の眼障によって知恵の眼がまさしく衰えた者が、誤って

本性と他の事物や、  
事物と無事物そのものであると見る  
者達は、仏陀の教えに、  
真如を見るのではない。 6

如来の善説を誤りなく解説しているとまさしく思い込んだことによって、「地の本性とは堅固である。」「感受作用の（本性）とは経験することである。」「識の本性とは対象をそれぞれに知覚することである。」と、そのように諸事物の本性を語り、「色形は他であるが識もまた他であり、感受作用もまさしく他である。」と、そのように他の事物を語り、現在時点となった識等は事物であり、あるいは過去となった識等は無事物であると語る彼らは、最高に深甚な真如である縁起生を語るのではない。

何故ならば、本性と他の事物等がまさしく有ることは、斯くも説かれた道理と反するものであるが、如来方は、道理に反する事物の本性を説かれたのではない。（何故ならば）ご自身が余さぬ事物の真如を誤りなく御存知である故である。まさしくそれ故に、賢者方は諸仏世尊のみの御言葉を正しいと述べることをする。（何故ならば）合理を具えるので欺かない故である。まさしくそれ故に、過失を残らず捨て去った信頼より訪れる故に、あるいは全てを理解させる－真如を全てから理解させる故に、あるいは向かって行く－それに依拠して世間が涅槃へと赴く故に、完全なる仏陀の御言葉そのものを経証として設けるが、それより他の諸々の説論は合理と離れるので、不正そのものであり、まさしく経証ではないと置かれる。

諸事物が本性として有ることを否定する>本性として有ることに批判を示す> [経証による批判]

何故ならば、本性と他の事物や、事物と無事物であるの見解するこれらは正理と離れるので、真如ではないまさしくそれ故に、解脱を求める所化<sup>4</sup>の者達へ、

世尊は事物と無事物を、  
御存じであるので、カタヤナの  
教誨で、有と  
無の双方をも否定された。 7

<sup>しよけ</sup>  
4 所化：教化される者。弟子。

世尊が、『迦旃延<sup>5</sup>への教誨』より、

「迦旃延よ。何故ならば、この世間は概ね有性と無性を頭かに執する。然れば、生と老と病と死と悲痛と悲鳴と苦と不幸と争い等から完全に解放されたとならない。五衆生の輪廻より解放されたとならない。死に打ちのめされる苦しみより完全に完全に解放されたとならない。」

と、詳細に説かれたのであるが、この経部も一切の部によって唱えられるものである。それ故に、この経証と斯くも説かれた正理より、智慧ある者によって、如来の御言葉と非常に反する、本性と他の事物や、事物と無事物であるとみる見解が承認されるには能わない。(何故ならば) 世尊によって否定された故である。

「世尊が、特別に優れたものによって」とは、事物と無事物を御存知であることによってであり、ここで事物と無事物を御存知である性質をお持ちであるので、事物と無事物を御存知なのである。事物と無事物の本性を留まるままに誤りなく完全に御存知である故に、「まさしく世尊が、事物と無事物を御存知である」という。何故ならば、世尊は事物と無事物を御存知であることによって、有性と無性の双方とも否定された故に、「事物と無事物と見ることは真如である。」と承認したことは正理ではない。

その如く、

「迦葉よ。『有』というこれは、一つの辺である。『無』というこれは、二つ目の辺である。その二つの中央であるそれは、分析されるものとして無く、示されるものとして無く、拠所ではなく、現れること無く、知覚されること無く、留まることは無い—迦葉よ。これは『諸法を妙観察する中の道』という。」

と説かれた。その如く、

「有と無とは二つとも極辺である。浄と不浄のこれも極辺であり、それ故に二つの極辺を尽く捨て去り、賢者は中にも留まり有るとしない。「有と無」とは論争であり、浄と不浄のこれも論争である。論争となった苦しみは鎮まることは無い。論争が無くなることによって苦しみが滅す。」

と説かれた。

諸事物が本性として有ることを否定する>本性として有ることに批判を示す> [理証による批判]

ここで言う。「もしまた、そのように火等は本性のみよりまさしく有るとなれば、如何なる過失となろうか。」

<sup>5</sup> 迦旃延: Kātyāyana 釈尊の十大弟子の一人。



「因と縁より起こった、本性は、所作を持つものとなる。」<sup>6</sup>  
等によって、過失は既に述べた。

他にも、「もし、これら火等の、本性の「まさしくこれ」が有るならば、有となったそれも他に変化したのではない。」と示す為に、

もし、本性として有るならば、  
それは、無性にはならない。

と説かれ、もし「まさしくこれ」が、これら火等の本性—自らの本質であるとなれば、その時、本性として有るその本性において、再度他に変化することは無い。何故ならば、

本性が他に変化することは、  
いつ時にも合理とはならない。 8

もし、「まさしくこれ」がこれら火等の本性であるとなれば、その時、本性とはまさしく変化しないものである故に、いつ時にも他に変化することは合理ではない。虚空の非遮蔽性が何時も他に変化するのではないが如く、火等の本性として有るものも、再度他に変化しないものであるが、それらが他に変化するという、継続性が切れる性相を持つ「壊」とは、君によって認められるものでもある。それ故に、様相として変化する主体である故に、水の熱性のように「これはこれらの本性ではない。」と知りたまえ。

ここで言う。「仮に、本性として有るものに他への変化が有るのではない故と、他への変化そのものも認める故に、『これらの事物に本性は有るのではない。』と述べられるけれど、そう見るとしても、

本性が有るのでなければ、  
他に変化するとは、何のものであろうか。

これは、虚空の花のように、本性—自らの本質として有るのではないので、他への変化は何のものであるとなろうか。それ故に、本性が有るのではないものに他へ変化することは認められていない理由に対して、まさしく他へ変化することも見られる故に、本性は有る。」

<sup>6</sup> 「因と…となる。」:『根本中論』第 15 章 1 偈。

述べよう。もし君の説が、「本性—自らの本質として有るのではないものにおいて他へ変化することは無い理由に対して、他への変化も見られる故に本性は有る。」と言うのであれば、そう見るとしても、

本性が有るのであろうと、  
他への変化が、如何にして適おうか。 9

ここで、現在起こったもののように本性—自らの本質として有る故に、他への変化は何のものであるとなろうか。それ故に、本性として有るものにおいて、他へ変化すること自体が有るのではない故に、他への変化は一切の様相においてまさしくあり得ない。それ故に「諸事物に本性は無い。」と知りたまえ。

「何でも他へ変化することが見られる故に、本性は有るのではない。」と説かれたことも、他者に公認された他への変化が見られるとして述べられたのである。しかし我々は何時、何においても、他に変化することが有ると承認していない。

章の著述を説く > [本性として有ると言えば、辺執を超えないと示す]

それ故に、そのように本性は全く有るのではなく、一切法（現象）は有るのではない本性を持つものであることと、それらにおいて他に変化することも有るのではないながら、現在或る者が、諸事物はまさしく有る・まさしく無いと考察する。そのような考察においては、全く確実に

有るとは恒常であると捉える。  
無いとは断滅と見る。

という背理になるだろう。何故ならば、この恒常や断滅と見る見解も、善趣と浄化解脱の道の邪魔をするものである故に、大きな不利益を為す、

それ故に有と無に、  
賢者は留まることをするな。 10

また何故に、事物や無事物であると見る見解が有れば恒常と断滅の見解となる背理になるかといえば、このように、

本性として有る何か。  
それは無ではないので、恒常である。  
以前に起こったものが現在に無いという。  
然れば、断滅の背理となる。 11

本性として有ると述べられる何かが、本性において退くことは無いので、いつ時にも無ではない。そのようであれば、本性がまさしく有ると承認したことによって恒常であると見る見解になる。しかし以前に留まった時点において事物の本性を承認して、現在、後に「それは壊失したことによって無い。」と承認したことで、断滅の見解である背理となる。

或る者のように、事物の本性そのものが不合理である者にとっては、恒常と断滅の見解になる背理とはならない。(何故ならば) 事物の本性を認識していない故である。

「仮に『諸事物は本書が有るのではない。』と承認する者にとっては、事物であると見る見解は無いので、常見(実在視)は勿論無いだろうが、断見(虚無見)となる背理に、确实になるのではないか。」といえよ。

そのように虚無見とはならない。このように、以前に事物の本性を承認して、後にそれが無くなることに依拠する者は、以前に認めた事物の本性を抹消したことによって虚無見となる。しかし、眼障を持つ者が認めた落髪に対して、眼障が無い者のようになり、(落髪等は)何も認めていない者が「無い。」と言ったことによって、何が虚無であると言ったとなろうか。(何故ならば) 否定する対象が無い故である。誤りとなった者達の間違った執着を斥ける為に、眼障が無い者達のように「一切事物は有るのではない。」と我々は勿論言うが、そう言ったとしても、我々が虚無であると見解する背理になるのではない。

斯くも経典より、

「世尊よ。或る者が、以前に貪欲と瞋恚と愚痴等を(事物であると)承認されて、後に『貪欲と瞋恚と愚癡は有る事物ではない。』と言うことは、虚無にもなります。」

と詳細に説かれた如くである。

依他起性<sup>7</sup>である心・心所<sup>8</sup>の単なる事物を承認して、それに遍計所執<sup>9</sup>の自性

<sup>7</sup> 依他起性：唯識派の説く三性の一。因縁によって生じる事物。

唯識派の説く三性とは、依他起性・遍計所執性(脚注9参照)・円成実性(空性)。

<sup>8</sup> 心・心所：心の主体性である心(心王ともいう)と、条件が揃うことによって一時的に起こる心作用である心所。

<sup>9</sup> 遍計所執性：唯識派の説く三性の一。全て考察されたもの。有である恒常と、無が含まれる。空性の否定対象である「実在」は無いので、遍計所執性である。

が無いことによって実在視そのものを斥け、全くの煩惱と尽く浄化する因となった単なる依他起の事物が有ることによって、虚無見そのものを斥けるとする者の如くであれば、遍計所執は有るのではない故と、依他起は有る故に、有性と無性であるの見解する双方ともになる故に、二極辺を捨て去ったと何処でなろうか。因と縁によって生じさせられるとは、まさしく本性と共に有るとは適さないと既に示された故に、まさしく不正確な説明である。

それ故に、「そのように中観の見解のみに有性・無性で見解する背理が無いのであるが、識（は実在）であると言う見解<sup>10</sup>等においてはそうではない。」と知りたまえ。まさしくそれ故に、『宝行王正論』より、

「プトガラ、蘊（が実在する）と言う、世間の数論派、勝論派や、耆那教徒<sup>11</sup>を含めた、仮に誰かが、有無を超えたと言うならば問いたまえ。それ故に『仏陀方の、教えは不死であり、有無より超越した深甚である』と示された、法をつづら折りであると知りたまえ。」<sup>12</sup>

と説かれた。

まさしく勝義<sup>13</sup>を見る方便となる故に、所化の者がそのような様相に考察する面前に、世尊がまさしく大慈悲に突き動かされて、「正量部<sup>14</sup>のプトガラ（が実在する）という言説のように、識（が実在する）という言説<sup>15</sup>は、まさしく未了義<sup>16</sup>であると示された。しかし了義<sup>17</sup>として（示されたの）ではない。」と知りたまえ。

斯くも『三昧王経』より、

「空を如来が説かれたように、了義の経部の分類を知れ。ある部より有情やプトガラや人士が示された、その一切の法は未了義であると知れ。」と説かれた如くである。これは、『無尽慧経』等よりも詳細に理解したまえ。

それ故に、解脱を求める聖者方が「事物や無事物と見る二つの見解の機会がある限り輪廻するのである。」と了解されて、この二つの見解を斥けた一中の道をかかある如く修習したまえ。

因縁を我所（我がもの）とすることが、本性として有ることを否定する＞ [了義の教証と合わせる]

世尊が、

10 識（は実在）…見解：唯識派の見解。

11 数論派…耆那教徒：非仏教徒の学派。

12 「プトガラ…たまえ。」：『宝行王正論』第 1 章 61・62 偈。

13 勝義<sup>しやうぎ</sup>：聖なる真実。世俗の真実に対する。

14 正量部：部派仏教の一部。プトガラ（人）に実質が有るとする。

15 識…言説：唯識派の言説。

16 未了義<sup>みりやうぎ</sup>：究極ではない経典の意味。

17 了義<sup>りやうぎ</sup>：言葉通りに解釈してよい、経典の究極の意味。

「一切は不可思議で、一切は起こるものではないので、事物や無事物であるとする知を尽く壊せ。心の力に操られる幼子、彼らは百千万の有（輪廻）を苦しむ。」

や、その如く

「昔、不可思の過去の劫において、人の主が現れたことを私は思い出す。偉大な仙人は舟の働きをなされた。名を『無事物より現れた』といった。

生まれて直ぐ空中に浮き留まり、一切諸法は無事物であると示された。その時、それに合わせて御名が付けられ、大声音が全世界へと知らせめた。

一切諸天は大きく声を発した。『無事物という勝者となるだろう。』

生まれたばかりで七歩を歩み、勝者が諸法（現象）は事物が無いと説かれた。会得者が一切諸法を示す法王、仏陀となった時、諸々の草木の枝や、薬山、大岩から『諸法は事物が無い』という声音も起こった。

その世間に声音がある限り、『一切は事物無く、何も無い』と、そのように世間を導く者の、声の旋律は優れた様相で起こった。」

と説かれた。

「事物の本性は不合理である故に、『諸法は事物が無い』という声音も起こる。」等によって経典の意味を理解すべきであり、

「その世間に声音がある限り、『一切は事物無く、何も無い』と」等が現れることによって、絶対的否定が述べられたと主張するが故に、「無事物」の意味は、本性が無い意味である。

因縁を我所（我がもの）とすることが、本性として有ることを否定する＞ [章の名を示す]

阿闍梨月称の御口より綴られた頭句より、「本性を考察する」という第十五章の解説である。